



雑木林の古民家より

～つくばの残したいもの～



神楽坂建築塾第四期塾生
平野 匡城

人が手をかけて育ててきた里山の自然は子供達の遊びの場であり、豊かな実りの林やマです。

子供達を自然の中で思いきり、五感を開放させてのびのびと遊ばせたいと願っていた親子達と、生産や生活と切り離され、荒れるに任せていたヤマを何とかしたいと考えていた地主さんとの幸運な出会いがありました。

草を刈ったり、木を植えたりとヤマの管理のお手伝いをしながら、自分たちの責任で、自由に思い思いにヤマの遊びが始まりました。

― 雑木林で遊ぶ会HPより

つくばの紹介

つくば市は85年につくば万博が行われた事や筑波大、研究機関などが多くある事などから科学技術都市として有名です。元々ここには筑波山の麓にひろがる六つの町村がありました。そこにはごく普通の田舎の景色が見られました。そんな広大な土地に国家事業によって昭和40年代後半から作られたのがつくば学園研究都市です。それぞれの町村の中心部から外れた台地を造成して学園は作られました。なにも無かったところへ短期間で都市が作られ何万もの人々が移住してきました。今までの時代の流れから言ったらその早さは急激だった事でしょう。最初は大学と公務員住宅のみだった学園の中心部もデパートの進出、国際会議場、研究機関の移転、モーターゼーション前提の街割、東京駅との直通高速バスの開通等を通して次第に新しい街として形成されました。今では隣の土浦よりも栄え近隣の街からも人々がつくばへ買い物等で訪れる求心的な地方都市へと成長しています。その裏には学園都市と万博という国家事業のおかげと言うものもあります。

しかし元々あった中心部はそのまま旧町村部に住む人々から見れば同じ市内なのに学園ばかり整備されていってこちらはちっとも良くならないというつり、そのギャップは実際に生活していても感じます。今でもこの街では学園と旧町村部と言う言い方が残るくらいに人々の意識の中にそれは表れています。



雑木林で遊ぶ会

雑木林で遊ぶ会の雑木林はつくば市東部の上境という地区にあります。ここで月に一度ぐらいのペースで子供達も大人達も自分達の



責任で自由気ままに活動しています。もちろん雑木林の保全是月に一度ではなくメンバーの誰かが常に雑木林の保全をおこなっているのは言うまでもありません。偶然にもここに一軒の民家があります。十年くらい前、民家の実験の為に隣町から移築されたこの民家、今ではすっかり丘の上の雑木林のシンボルとして子供達へは格好の遊び場として、大人達にはくつろぎの場として鎮座しています。

雑木林で遊ぶ会では特別な自然教育プログラムとか、学習とか言う事はおこないません。会がある日は大体10時ぐらいから丘の上に集合します。集合といってもパラバラと人が来ます。最初に大人達はパーベキューの火を起こします。ブロックと鉄網で竈を作ります。薪になるのももちろん雑木林に生えている木枝等。今は栗の木が多いので秋に伐採した栗の小枝を使いました。火を起こしている横ではその日の食材を色々下準備しています。その頃子供達とはいうと、思いつきはしゃ

いでいます。ボール遊びをしたり近隣の森へ入っていったり、民家の二階に上がる梯子を掛けて2階へ上がって梁の上で遊ぶ子供がいたり、座敷の上にちゃぶ台を持ってきてトランプをやっている子。遊び方は自由です。春や秋には子供達に野草を取ってきてもらいます。春だったらクズの芽やタンポポの花、カキの若葉、シロザ、セリ、ウド、クワイモ。秋は栗、アケビやノビル、ムカゴ、クワイモ、ヨモギ。雑木林には自然の食材もいっぱいです。そうこうしているうちに、お昼が出来あがります。野草の混ぜご飯、てんぷら、パーベキュー、に鍋。その季節に応じて様々な物が出てきます。このときばかりは子供のパワーに圧倒されます。食事の後半になると子供達は小枝の先にパンの生地をつけてのパン焼き、マシュマロ焼。大人の為にはコーヒーが。このまま夕方まで昼食は続きます。午後には竹細工をしたりもします。材料ももちろん雑木林から。竹をのこぎりで切って小刀で竹とんぼや風車を作ったり。こういう場ぐらいで

しかナイフを使う機会が無い今の子供達ですから当然手を切ってしまう子もいます。その為にちゃんと救急箱は常備されています。ここでは自然を身をもって体験しているのです。さて、この民家。玄関の表札を見ると昭和48年の国税調査の札が張られていたので30年ぐらい前までは隣の八郷町で使われていたようです。その民家を取り壊されることを知った筑波大の学生がこの民家を守りたいと言う事で大学の先生をお願いして今から15年くらい前に実験と言う名目でここ上境に解体移築されたそうです。(後に知った事ですがこの先生と言うのが建築塾の講師でもある筑波大の安藤邦廣先生でした)会のメンバーの方に話を聞くと十年くらい前まではロープで民家を引っ張って強度を試したりしていたとか言う話も聞きました。その後この管理は雑木林で遊ぶ会に任されたと言う事らしいです。今、子供達は民家を秘密基地のように遊んでいますし、大人達はこの民家を見ながら昔の生活の話に花を咲かせています。この民家には囲炉裏と竈もあったのですが、心無い人によって壊されてしまいました。昔乍らの雑木林ですからいつでも誰でも入る事は可能です。また常に誰かが見ると言う事も出来ません。結構痛みも激しいので会の人々で何とか屋根の葺き替えと壁も修理したいと言う話を最近盛んに話しています。ただ自分達ではどうしようもないのも事実ですが、特に萱の保全には囲炉裏で燻すのが有効と思い、この一月に囲炉裏の復活と言う事で、囲炉裏を焚いてみました。冬の寒い日だったので囲炉裏の暖かさがじわじわとを感じる事が出来ました。囲炉裏の火でパンを焼いたりする子、囲炉裏の番をしてくれる子、様々でした。本来だったら生活の為の民家ですが、ここではヤマ遊びの為の民家としてメンバーみんなから好かれています。この民家は民家園の民家のように保存される為の民家ではなくて遊び場としての民家であると言うところが貴重なようにも感じます。

残念なのはこの会に参加しているのは学園部の人々が大半で地元の方との交流があまり無いと言う事です。学園部に暮らす人々から見れば魅力的な民家や自然も旧町村部の人々から見ればみずばらしい物だったりします。旧くて暗い家よりは明るくて学園部にあるような家に住みたいと思うでしょう。事実旧町村部でも結構なスピードで旧い家が現代風の家に立てかえられていたり、更地になったりしています。つくばの二重構造がこんなところにも出てきています。

このような素晴らしい所・・・今素晴らしいと言いましたが旧町村部ではごく当たり前の光景です。都市生活者の目から見ただけこの様な景色が遠くへ行ってしまったと言う事かもしれません。旧き良き日本の風景。実際につくば市内を色々と散策してみるとわかるのですが、旧町村部には多くの魅力的な街なみが残っています。そんな中から今回はつくばのシンボルである筑波山までの道を歩

いてみましょう。



雑木林での遊び方は人それぞれ。家の中でトランプしたり、竹細工をしたり。

2階はちょっとした秘密基地です。左下/壊されてしまった竈 右下/復活した囲炉裏でパンを焼いています。



つくば道

古くから筑波山は信仰の山として有名でした。特に江戸時代に物見遊山が流行った頃は関東でも箱根と並ぶ観光地として多くの人々で賑わいました。その筑波山への参道に当たる道がつくば道と呼ばれています。いまだこそ筑波山を訪れる人は東側からのスカイラインを通過して自動車で直接行ってしまいますが、昔からのこの道の途中には城下町北条、門前町神郡などの魅力的な街並の真中を通過して残したい風景のひとつだと思います。

北条

元筑波町の中心部に当たる北条はつくば道の入り口に当たります。北条の街並も変わり始めています。日々旧くて立派な家が無くなっています。歩いてみると解るのですが北条には蔵を持った家が結構あります。メインストリート沿いには昔乍らの町屋の光景が見られたり、当時にしては珍しいであろうコンクリート造りの病院があったりします。ここには元々鉄道が通っていました。当時は隣の土浦との結びつきが強かったことも鉄道廃止後はモーターゼーションの波と学園都市に近い事（当然市内ですから）も影響し車でつくばセンターのほうへ行くように人の流れが変わ

てしまいました。これが隣の土浦の中心街が寂れてしまった要因の一つに挙げられたりしています。北条のメインストリートには商店会があって店もいくつかありますが、人の流れを見ていると車で大きな駐車場のあるスーパーへほとんどの人が行っています。こう見ると北条は街ではなく住宅地になってしまったようにも考えられます。歩いていて残したいと思う建物や景観がいくつもあるこの北条ですが聞いた話によると、地元の方に守ろうと言う意識はあまり無くそれが物凄い勢いで残してみたい建物や景観が消えていっている事に繋がっていると言えます。

神郡

北条から続くつくば道はしばらく野山の中を抜け向こうに広がる広大な田んぼが見えると急に右に曲がり集落の中に入ります。ここが門前町神郡。筑波山のお膝元のこの土地にはつくば道を中心に街並が見られます。北条に比べると昔のままの姿を留めています。道の両側にある家々には立派な長屋門があったり堂々とした大谷石造りの蔵が建っていたりとその存在感を私達に見せ付けてくれます。北条にある蔵はほとんどが土蔵なのに比べてここ神郡には大谷石のものが多くたった数キロしか離れていないのにこれだけの違いが見られるのも面白いです。最近ではJRのパン

フレットにもこの街なみが紹介されたり見直されつつある土地です。特にこの辺りは江戸時代に將軍家へ献上していた北条米の産地です。米と言うのは水のきれいな所程美味しいと言われていてこの辺りの水は筑波山の自然がろ過してくれた湧き水を利用しています。地区の外れにある蚕影山神社は全国各地にある同名の神社の本社で養蚕が盛んな頃は各地から人々がお参りに来たそうです。また神郡から見る筑波山は紫峰筑波と言われるのも解るくらいに美しい。ある意味こういう良い所に住めて、センターまで車で20分ほどで行ける事を考えるとこの辺りの人々はなんて贅沢だろうと思ったりもします。



北条の街並には昔栄えていた頃の記憶がしっかりと刻まれている



正面上にHOSPITAL TUCHDAと家紋が掘ってある。

北条

昔、多くの人々が筑波山へと往来したであろう北条の街。今ではすっかり人気が無く建物ばかりが当時を語っている。



大谷石造りのこの蔵は現在ギャラリーとして使われている。

神郡

門前町神郡の魅力に誘われてここを訪れる人が少しずつ増えています。



神郡には旧家の屋敷も多数あり、長屋門を持つ家が意外に残っている。





上の方は階段道が残っている

筑波

筑波

平坦なところを通ってきたつくば道もいよいよ山の斜面を登り始めます。筑波山神社を目指して伸びる一本道は途中にある鳥居をくぐると斜面がうねうねとしてきます。元々神社への参道だったこの道。鳥居から神社までは階段になっていました。そこを自動車を通れるようにした為にこの様な道になっているのです。この辺りからは関東平野が一望できます。江戸の人々が信仰の山として拝んだ筑波山。まっ平な関東平野のなかではひときわ目立ちます。余談ですが私の今のさいたまにある仕事場のビルからも筑波山は見えます。この階段道からつくば神社にかけてが筑波地区になります。この辺りも蔵や屋敷がポツリポツリと見えます。階段道は今のスカイラインによって分断されていて、スカイラインから上部は観光地筑波としてホテルやお土産店が建ち並んでいます。最近是不況で近場への行楽が流行っているからか、温泉で売り出したからか解りませんが、休日には観光客が随分と見られるようになりました、しかし以前来た時には閑古鳥が鳴くような状態でした。観光客はスカイラインより上の方を訪れるのですがそれより下のこの階段道の辺りが面白い。この辺りも良い水が出るらしく筑波七井とよばれる聖なる井戸が以前はあったのですが今では使われなくなってしまっていて、数年前に市の職員と一緒に七井を探しに調査したこともあります。



歩いてみて

今回紹介した地区は行ってみると解るのですが今は人気も余り無く寂しい感じがします。



元は階段の参道だった道も自動車用に坂に変えられてしまった



構造の増田先生が設計した筑波第一小学校体育館
斜面に建っている姿は圧巻



階段道脇にある集会場も趣がある



筑波山山頂から筑波道を眺める。手前から筑波、田んぼの向こうが神郡、その先、山を越えたところが北条
しかし昔この地が栄えていた頃のパワーを街なみや地割、雰囲気から感じる事が出来ます。このままここが人々から忘れ去られ、どこにでもあるような住宅地になるのは寂しい気が
します。こういう土地だからこそ、眠っているその土地の力を再生と言う形で呼び覚ます事も出来るのではないかと思います。

常盤新線と雑木林

話は雑木林に戻ります。今、上境の雑木林は開発によってどうなるか解らないところに来ています。というのも常盤新線（通称つくばエクスプレス）の開通に伴う開発地域に上境付近が指定されているからです。常盤新線が計画された当時は郊外住宅の需要が見込まれていたのですが、現在では都心回帰が叫ばれていて郊外への住宅の需要は余り無いのが現状です。しかし造り始めてしまった物やめるわけにも行かず、平成17年の開業を待つ段階まで来ています。予定ではつくば市内でも東京への通勤の為に大量の宅地が供給される予定です。これを見ていると、つくばは自らベットタウン化しようとしているように感じてなりません。それ以前にこれだけの宅地を作ったところで売れるのだろうかと言うのも問題だとは思いますが、売れなければ常盤新線の乗客を作ることが出来なく経営が赤字になってしまいます。ただ私を含めて現在都内へ通勤している人にとっては秋葉原まで45分と言うのは否定できないものである事も確かですが、これを見ていると住む事が意外とないがしろにされてきているのではないかと感じます。宅地開発で業者は儲かります。つくば市も人口が増えれば税収も増えて儲かるでしょう。しかし街としてはどうなのでしょう？都内で働いている人は基本的に平日はつくばにいません。街は常に人々がいて活気があるものだと思います。「人が住むって何だろう？」家を持って寝に帰ってればそれで住むという事なのでしょう？人は昔から自分の生活のしやすい場所を選んで家を構えてきました。何人かの人々が同じ場所を選んでそれが集落になって、村になって、街になるのだと思います。街というのは住む人があってのもの。今回のこの件を見ていると家を持つと言う事を主体にした開発であるように思えます。時代がそういうものを求めているのかもしれませんが、本来だったら住む場所で働ける事が暮らすということで理想なのでしょう。

まとめ

結局、街というのは住んでいる人のものです。住んでいる人々が望む姿になる物だと言う事を考えれば、今のつくばで旧い街並が日々消えている姿はそれとして受け止めなければならないと思います。ただその旧い街並が素晴らしい物、残したい物であれば、それを訴える事が外の人から出来る唯一の手段だと思います。（もちろん住人が残したいと思いたい行動するのが一番ですが）もしそれに対して住人のうちでも一人でもそう思ってくれる人が現れれば、若しくは思っただけでも何も出来ないと思っている人達が集まるきっかけが出来れば、そう言った所から街の再生は起こるでしょう。そういう思いも込めて今回ここで雑木林とつくば道周辺を紹介しました。またこれらは私がつくばを案内する時にまず連れ

て行こうと思う場所です。

会のメンバーの矢澤さんより「雑木林で遊ぶ会で囲炉裏を作ったのも、皆で囲炉裏を囲んでこれからの雑木林について、街づくりについているんな人が集い、議論し、行動できる拠点になればとの思いからです。茅葺きの吹き替えもやらなくてはと地主さんからいられています。雑木林は関わってくれる人がすべてメンバーです。」と言われました。



何も無かったところに鉄道が通って駅が出来、街が作られる予定地

